

短報

## 保育者の視点から捉える園内飼育動物とのかかわりが幼児の発達に与える教育的効果

栗田薫平・西村信子\*

(株)ブライトケア・ヤマザキ学園大学動物看護学部動物看護学科

(平成 27 年 2 月 24 日受付 / 平成 27 年 4 月 11 日受理)

### The views of preschool teachers on the educational effects on toddlers with animals in kindergarten and the premises

KURITA Kunpei・NISHIMURA Nobuko\*

Bright-care Co. Ltd.・School of Animal Nursing, Faculty of Animal Nursing, Yamazaki gakuen University

(Received February 24, 2015/Accepted April 11, 2015)

**Abstract** : This questionnaire survey research explored the views of preschool teachers on the educational effects of having animals on kindergarten premises and its influence on toddlers' psychological development. Study subjects comprised 130 preschool teachers. Results showed that many of preschool teachers were hoping that animals are a positive impact on toddlers. Although they had concerns about animal allergies, infectious diseases, and injuries, they perceived that interacting with the animals nurtured sympathetic emotions toward the animals as well as psychological development in toddlers, such as their ability to take on roles and see things from the animals' perspectives, and in maintaining psychological stability. Further, the study showed that preschool teachers perceived that, by experiencing the birth and death of the animals, young children could learn about the different stages of life as defined in Piaget theory of lifespan development (2007).

Key words : Animals in kindergarten, premises, preschool teachers, toddlers, educational effects, psychological development

*J. Anim. Edu. Ther.* 6: 1-7, 2015

#### 1. 問題と目的

幼児が動植物とのかかわりをもつことは、生命の尊さやいたわり等豊かな心情や科学的素地にもつながる思考力を育むと幼稚園教育要領（文部科学省 2008）では明記されており、保育の場における自然体験活動を通して幼児期の子どもの共感性や役割取得能力を発達させることは極めて重要と考えられる（井上、無藤 2007）。保育現場における飼育動物と幼児の発達との関連性について調査した濱野（2007）は、幼児期の子どもにとって飼育動物とふれあうことは共感性や役割取得能力の発達を促す効果があると示唆している。また、園内動物飼育実態調査を実施した柿沼ら（2004）

は、動物とのふれあいを通して幼児は分離不安の軽減、責任感や共感性の促進、対話の増加（保育者—幼児、保育者—保護者、幼児—保護者、保護者同士）などの肯定的な効果がある、と報告している。

さらに、幼児期における生命概念は未構築と考えられている（ピアジェ 2007）が、保育現場では飼育動物とのかかわりを通じた幼児への生と死の教育は関心が高いことがこれまでの研究で明らかとなっている（谷田、木場 2004；野田・竹内 2002）。幼稚園での園内動物飼育効果について調査した谷田と木場（2004）は、全体の 86% が園内での動物飼育に満足していると回答し、動物飼育は思いやりや責任感などの心の教

\* 連絡先 : n\_nishimura@yamazaki.ac.jp (〒 192-0364 東京都八王子市南大沢 4-7-2)

育、死の教育、理科的な知識の教育、さらには園生活適応に有効、などの肯定的な効果が確認された一方、95%の園が衛生・繁殖等の管理について不十分と回答している、と指摘している。

現状において、幼児期の子どもの発達への園内動物飼育の有効性は徐々に実証されつつあるものの、衛生管理面や動物の死を含む繁殖管理面での問題点については地域やそれぞれの園によって差異があり十分な改善がなされるとはいえない。以上のことから、本研究では実際の保育現場において日ごろ幼児の心身の成長・発達を見守る保育者が考える園内動物飼育の教育的効果と幼児にとっての園内飼育動物のあり方について明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

1) 調査手続き：2013年9月から11月の期間、電話にて調査協力を依頼し事前に承諾を得た都内幼稚園(11園)に対し、留め置き調査法を用いた質問紙調査を実施した。168部を配布し、130部を回収した(回収率77.3%)。対象者130名は、いずれも本調査回答時に保育者として幼稚園に勤務する男性保育者9名、女性保育者118名、性別不明3名に分類された。また、対象者の年齢は20代49名、30代29名、40代27名、50代20名、60代以上4名、年齢不詳1名であった。用紙の表紙には、調査目的に加え、調査協力者への回答の自由、回答中断の権利、個人情報取り扱い等、調査倫理に関わる注意事項を明記した。また、調査協力者への同意は、質問紙への記入をもって同意とすることとした。なお、統計処理はIBM SPSS Statistics Base Grad Pack 22.0を使用した。

2) 調査内容：(1) 幼児と動物とのかかわり尺度：幼児と動物とのかかわり尺度は、保育者28名(男性8名・女性20名)を対象に行なった予備調査の結果をもとに、幼児と動物とのかかわりに関する項目について内容妥当性を検討し15項目を抽出した。各項目は、「全くそう思わない」から「とてもそう思う」の5件法で評定を定めた。(2) フェイス項目と自由記述：保育者の①性別、②年齢、③配偶者の有無、④子育て経験の有無、⑤家庭動物飼育経験の有無、⑥園内動物飼育への賛否、⑦動物飼育を行う園での勤務経験の有無について尋ねるフェイス項目に加え、保育者が考える園内飼育動物と幼児への動物飼育効果に関する自由記述による回答を求めた。

## 3. 結果

1) 幼児と動物とのかかわり尺度：幼児と動物とのかかわり尺度15項目について主因子法・Promax回転による因子分析を行なった。因子数は固定値1以上

を基準とし、因子負荷量が3.5に満たない2項目(「動物は子どもにとっての友達になる」「知的好奇心を促すきっかけとなる」)については削除し、再度因子分析を行なった結果13項目3因子構造であることを確認した(Table 1)。第1因子は、「子どもは命を大切にできる心が育つ」、「子どもへ命を教える存在となる」など、動物の存在が与える心理面での発達についての7項目で構成されていることから「動物介在により育つ幼児の心」と命名した。第2因子は、「様々なことに積極的に取り組むようになる」、「落ち着きのない子どもが集中できる」など、動物の存在が与える行動面での変化についての4項目で構成されていることから「動物介在により変化する幼児の行動」と命名した。第3因子は「子どもにとっての「避難所」になる」、「寂しさをまぎらわせることができる」といった心の拠り所としての動物の存在についての2項目で構成されていることから「幼児の居場所としての動物」と命名した。内的整合性を検討するために、各因子の下位尺度についてクロンバックの $\alpha$ 係数を算出した結果、動物介在により育つ幼児の心.85、動物介在により変化する幼児の行動.87、幼児の居場所としての動物.76と、いずれも十分な値が得られ、信頼性が確認されたと判断した。

2) 下位尺度間の相関：幼児と動物とのかかわり尺度の因子分析において、各因子に高い負荷量を示した項目の合計得点を各下位尺度得点とし、下位尺度間相関を求めた。その結果、3つの下位尺度間全てにおいて1%水準で正の相関が認められ、互いに関連のある下位尺度であることが確認された(Table 2)。

3) 保育者に関する7フェイス項目による各下位尺度の平均値(標準偏差)と $t$ 検定結果

園内飼育動物とのかかわりと幼児の発達に関する保育者の考え方には、保育者自身の経験である上記①～⑦のフェイス項目が影響することが推測され、幼児と動物とのかかわり尺度の3下位尺度得点について $t$ 検定を行なった(Table 3)。以下は、3下位尺度得点別に検討した結果である。なお、保育者の①性別、⑥園内動物飼育の賛否、⑦園内動物飼育を行う園勤務経験の有無の3フェイス項目2群の対比については、いずれもサンプル数に偏りがあり統計分析に値し難いため(女性113名と男性9名；賛成118名と反対5名；経験有100名と経験無11名)、本調査対象に限定したものとして検討した。

(1) 「動物介在により育つ幼児の心」下位尺度：「子どもは命を大切にできる心が育つ」、「思いやりのある子どもが育つ」など動物の存在が与える心の発達や教育的効果をみる「動物介在により育つ幼児の心」下位尺度得点については、①～⑦の全フェイス項目において

**Table 1** 幼児と動物とのかかわり尺度についての因子分析結果（主因子法, *promax* 回転）

	因子		
	I	II	III
<b>第 I 因子:動物介在により育つ幼児の心(<math>\alpha=.85</math>)</b>			
15子どもは命を大切にする心が育つ	.76	-.01	-.01
9 子どもへ命を教える存在となる	.74	-.10	.08
6 生と死を直接感じる事が出来る	.72	-.12	.08
7 世話を通し、子どもに責任感が芽生える	.66	.20	-.13
1 思いやりのある子どもが育つ	.63	.03	-.02
5 ふれあうことで感情豊かな子どもに育つ	.51	.26	-.02
2 独りである子がコミュニケーションをとれる	.39	.16	.16
<b>第 II 因子：動物介在により変化する幼児の行動(<math>\alpha=.87</math>)</b>			
8 様々なことに積極的に取り組むようになる	.06	.87	-.18
14 落ち着きのない子どもが集中出来る	-.14	.86	.18
10 言葉を持たない動物と接し、協調性を学ぶ	.08	.78	-.03
3 わがままな子ががまんをできるようになる	.02	.61	.20
<b>第 III 因子：幼児の居場所としての動物(<math>\alpha=.76</math>)</b>			
13 子どもにとっての「避難所」になる	-.04	.10	.77
11 寂しさをまぎらわせる事が出来る	.10	-.08	.75
<b>因子間相関</b>			
第 I 因子	—	.62	.41
第 II 因子		—	.58
第 III 因子			—

**Table 2** 幼児と動物とのかかわり尺度の下位尺度間相関と平均値（標準偏差）

	I	II	III	M	(SD)
I. 動物介在により育つ幼児の心	—	.60**	.37**	4.17	(.56)
II. 動物介在により変化する幼児の行動		—	.51**	3.11	(.78)
III. 幼児の居場所としての動物			—	3.59	(.81)

注) \*\* $p < .01$

有意な差は認められなかった。また、全ての下位尺度得点の平均値が5段階評価の4点「そう思う」を上回る高い得点を示していることから、保育者は自らの性別、年齢、家庭背景、保育経験、さらには園内外での動物飼育経験に因らず、園内飼育動物とのかかわりが幼児の心を育む教育的効果があり、その必要性があると感じていると捉えた。

(2) 「動物介在により変化する幼児の行動」下位尺度：「落ち着きのない子どもが集中出来る」、「言葉を持たない動物と接し、協調性を学ぶ」などを問う「動物介在により変化する幼児の行動」下位尺度得点については、保育者の②年齢に5%水準で有意な差が認められ、20代・30代の保育者に比べ40代以上の保育者の方が、動物とのかかわりが幼児の気になる行動を改善する効果があると捉え、期待していることが明らかとなった ( $t(126) = -2.05, p < .05$ )。保育者の③配偶者有無では、配偶者無し群と配偶者有り群との間に有意傾向がみられ、配偶者を有する保育者の方が動物を介した幼児の行動に変化を期待する傾向が認められた

( $t(126) = 1.89, p < .10$ )。一方、その他のフェイス項目においては「動物介在により変化する幼児の行動」下位尺度得点の平均値がほぼ5段階評価の内3点「どちらでもない」を示していた。保育者は自らの①性別、④子育て経験の有無、⑤家庭動物飼育経験の有無、⑥園内動物飼育への賛否、⑦動物飼育を行う園での勤務経験の有無に因らず、動物とのふれあいを通し幼児の行動面が変化するとは一概には言えないと考えていることが示唆された。

(3) 「幼児の居場所としての動物」下位尺度：保育者の②年齢については、0.1%水準で有意な差が認められた ( $t(128) = -3.29, p < .001$ )。40代以上の保育者は、20代や30代の保育者に比べ、園内飼育動物を幼児の心の「避難所」としてまた幼児が抱える寂しさを紛らわせる存在としてより強く認識していることが明らかとなった。保育者の①性別、③配偶者の有無、④子育て経験の有無、⑤家庭動物飼育経験の有無、⑥園内動物飼育への賛否、⑦動物飼育を行う園での勤務経験の有無については、2群の得点に有意な差

は認められなかった。また、下位尺度得点はいずれも5段階評価の4点「そう思う」に近い得点を示していることから、保育者の多くが性別、家庭背景、園内外での動物飼育経験に影響されることなく、園生活を送る幼児にとって園内飼育動物が安心感を与える存在で

あり、心の「避難所」または居場所となりうると捉えていることが確認された。

4) 保育者による自由記述

(1) 園内飼育動物に関する意見：園内における動物飼育について意見を求める質問に対し、保育者130

**Table 3** 保育者に関する7フェイス項目による各下位尺度得点の平均値（標準偏差）とt検定結果

		幼児と動物とのかかわり尺度			
			動物介在により育つ幼児の心	動物介在により変化する幼児の行動	幼児の居場所としての動物
① 性別	女性	N	116	116	118
		M	4.18	3.08	3.56
		(SD)	(.57)	(.76)	(.81)
	男性	N	9	9	9
		M	4.02	3.11	3.67
		(SD)	(.44)	(.72)	(.71)
		t値	.86	-1.10	-.37
② 年齢	20代・30代	N	79	77	79
		M	4.12	3.00	3.41
		(SD)	(.60)	(.81)	(.83)
	40代・50代・60代以上	N	49	51	51
		M	4.26	3.28	3.87
		(SD)	(.48)	(.70)	(.70)
		t値	-1.35	-2.05*	-3.29***
③ 配偶者	あり	N	61	62	62
		M	4.23	3.25	3.65
		(SD)	(.60)	(.79)	(.82)
	なし	N	67	66	68
		M	4.12	2.99	3.54
		(SD)	(.52)	(.75)	(.80)
		t値	1.12	1.89†	.82
④ 子育て経験	あり	N	50	51	51
		M	4.18	3.17	3.69
		(SD)	(.62)	(.87)	(.92)
	なし	N	78	77	79
		M	4.17	3.08	3.53
		(SD)	(.52)	(.71)	(.73)
		t値	.13	.63	1.06
⑤ 家庭での動物飼育経験	あり	N	89	90	91
		M	4.15	3.02	3.55
		(SD)	(.58)	(.70)	(.77)
	なし	N	28	27	28
		M	4.20	3.06	3.50
		(SD)	(.53)	(.82)	(.89)
		t値	-.41	-.21	.32
⑥ 園内動物飼育に対する意見	賛成	N	118	117	119
		M	4.18	3.13	3.58
		(SD)	(.53)	(.76)	(.82)
	反対	N	5	5	5
		M	3.86	2.95	3.60
		(SD)	(1.10)	(1.15)	(.55)
		t値	1.26	.50	1.45
⑦ 動物飼育を行う園での勤務経験	あり	N	100	100	102
		M	4.13	3.01	3.50
		(SD)	(.61)	(.76)	(.79)
	なし	N	11	11	11
		M	4.30	3.07	3.77
		(SD)	(.31)	(.77)	(.82)
		t値	-.91	-.24	-1.08

注) †p < .10      \*p < .05      \*\*\*p < .001

名中 49 名から自由記述による回答が得られた (Table 4)。保育者は、D「思いやりの心が育つと思います。」、X「動物とふれあうことで、安定していく幼児もいるので、動物を飼育することはよいと思う。」、DT「動物との関わり方として、大切にしたり、優しくする気持ちを持ったり、行動をとったりすることができると思う。(省略)」、V「生命の大切さを知るためにも、ぜひ必要。」、DO「生命の大切さについて気付くことができるので良いと思う。」など、園内動物飼育を肯定する捉え方がみられた。他方、BQ「休日の日の世話が心配。」や BR「(省略) アレルギーなど、様々な問題点をきちんと検討してから飼育したほうが良い。」、CY「(省略) 保育者が育て方を知らなかったり、興味がない、動物が好きじゃないことがある時、子どもに飼育についてしっかりと教えられていないことが多くあります。保育者がそこを徹底できないのな

ら動物の飼育には反対です。」など否定的な意見も確認された。園内動物飼育についての意見は肯定的なものが多かったものの、それに伴い発生する問題点を危惧する意見もあり、園内動物飼育の実施には保育者自身の知識の向上や管理体制の徹底が課題であることが明らかとなった。

(2) 幼児への動物飼育効果：幼児への動物飼育効果についての意見を求める問いに対しては、保育者 130 名中 55 名から自由記述による回答が得られた (Table 5)。保育者は、EA「(省略) いたわりにつながる豊かな心が育つと思います。」、N「入園当初の子に動物とふれあうことを促すと、心の拠り所にする子もいました。」、また AY「命の大切さを身近に感じることができる。(省略)」など動物の存在が共感性や他者視点能力を促進し命の教育にもなるとする肯定的な効果を挙げる意見が認められた。一方、CW「必ずしも、どの

Table 4 園内飼育動物に関する保育者 (49 名) の自由記述

保育者の記述による下位カテゴリー	数	保育者の自由記述例	
生と死	13名	AQ	「生命の大切さを知るためにも、ぜひ必要。」
		BB	「(省略)命について考えるきっかけ作りになるから。」
		DO	「生命の大切さについて気付くことができるので良いと思う。」
心の発達	6名	D	「思いやりが育つと思う。」
		V	「お世話をする事で、愛情や責任感(自分がいないと動物が困るだろうな。などの気持ち)が発達すると思う。映像ではなく、直接ふれあう感触(温かさ、手ざわり)は同じ生き物という共感が生まれると思う。」
		DP	「動物と触れ合うことで、優しい心を持つことができる。(省略)」
		DT	「動物との関わり方として、大切にしたり、優しくする気持ちを持ったり、行動をとったりすることができると思う。「自分より小さいんだ」と思うことで、自分の妹や弟のようにかわいがる姿も見られると思う。」
アレルギー	4名	BR	「賛成ではあるけれど、アレルギーなど、様々な問題点をきちんと検討してから飼育した方が良い。」
		BV	「(省略)アレルギーの問題もあり、難しいと思う。」
		BZ	「賛成だがアレルギー等を考えると、悩みます。」
動物飼育による良い効果	25名	N	「子どもの心を温かくしてくれる。又、楽しさ、面白さ、不思議さ、可愛さを感じさせてくれる存在。」
		X	「動物と触れ合うことで、安定していく幼児もいるので、動物を飼育することはよいと思う。」
		BH	「(省略)動物を介して、子ども同士、子どもと職員などのかかわりが生まれる。」
動物飼育の問題点	8名	BQ	「休日の日の世話が心配。」
		CN	「(省略)恐怖心を芽生えさせてしまったので、飼育については反対です。」
		CY	「(省略)保育者が育て方を知らなかったり、興味がない、動物が好きじゃないことがある時、子どもに飼育についてしっかりと教えられていないことが多くあります。保育者がそこを徹底できないのなら動物の飼育には反対です。」
		DM	「動物を飼うということは、生命を育てるということでもあり動物に興味関心のある子には、友達になったり世話をすることで責任感も出てくると思うが、年齢が小さければ小さいほどただ触りただけで、乱暴に扱って、動物がかわいそうだと思うことが多々ある。」

Table 5 幼児への動物飼育効果に関する保育者（55名）自由記述

保育者の記述による 下位カテゴリー	数	保育者の自由記述例	
生と死	23名	AY	「命の大切さを身近で感じる事が出来る。(省略)」
		BJ	「命の大切さや尊さを知る事ができると思う。(省略)」
		BQ	「命の大切さについて保育していくには、実際に動物を育てていく経験は必要であり、子に一番分かりやすいと思う。」
心の発達	29名	J	「(省略)責任感や優しさ思いやり思いやり等が育っていくと思う。(省略)かなしみ、喜び、色んな感受性が強くなると思う。」
		O	「(省略)生きものに興味をもったり愛着を感じるごことによつて責任感が出てきたり(省略)優しい気持ちを育てることにもつながっていく。(省略)」
		EA	「(省略)いたわりにつながる豊かな心が育つと思います。」
アレルギー	1名	BM	「(省略) (アレルギーも) 現実としてはむずかしい。(省略)」
動物飼育による良い効果	28名	N	「入園当初の子に動物と触れあうことを促すと、心の寄り所にする子もいました。」
		CJ	「(省略)“大切にする”ということ、子ども達が日々の中で触れ合いながら経験できる貴重な体験につながる。(省略)」
		CP	「(省略)生き物に触れ合うことによって子ども同士のやり取りや落ち着ける場所として心が安らぐなど癒しの空間になる。(省略)」
動物飼育の問題点	10名	CW	「必ずしも、どの子どもにも効果があるとは限らない(省略)苦手な子にとっては「怖い」という思いが強く、むしろ効果も何もない。(省略)」
		DB	「(省略)正しい育て方や接し方を知らない子どもも多く、そこを教える立場の保育者も分かっていないことが多いのがとても残念。(省略)」
		DX	「子どもによっては愛情表現を豊かにしてくれる相手になるとは思いますが、関わり方にもよるとは思います。」

子どもにも効果があるとは限らないと思います。(省略)」やDM「(省略) 年齢が小さければ小さいほどただ触りたいだけで、乱暴に扱って、動物がかわいそうだと思うことが多々ある。」、DX「子どもによっては愛情表現を豊かにしてくれる相手になるとは思いますが、かかわり方によります。」、など飼育動物のストレス、動物飼育の効果の不確かさを指摘する意見もみられた。保育者の多くが、動物飼育は幼児の心の発達や命の教育に有効と考えてはいるものの、実際に園内で動物飼育が実施された場合必ずしも保育者が望むような効果は得られないのではないかとこの疑いや不安も確認された。

#### 4. 考察

本研究では、調査対象となった保育者の多くが性別、子育て経験、園内外での動物飼育経験の差異に影響されることなく、園内飼育動物とのふれあいが幼児の心の発達を促進させると考えていることが明らかとなった。また、園内動物飼育を行う教育環境の中で幼児は共感性や動物の立場に立ち思考する役割取得能力を育み、命の尊さに気づく等教育的効果についての記述も多くみられ、濱野(2007)や柿沼ら(2004)の指摘を裏付ける結果となった。

集団内で孤立や逸脱する等の気になる問題を抱える

幼児への園内飼育動物の効果については、保育者の多くが疑問視していることが確認された。しかしながら、40代以上で配偶者のいる保育者は、他の保育者に比べ、園内飼育動物とのかかわりが幼児の問題行動を軽減させる効果あると考える傾向があり、また40代以上の保育者は他年代の保育者よりも、園内飼育動物は幼児にとって心の「避難所」となり寂しさを緩和させる存在と捉えやすいことも明らかとなった。40代以上の保育者は、その多くが家庭で子として、親として、また配偶者としての責任を負う立場でもあり、園では保育の専門家として豊かな経験を持ち中核を担う立場にある。そのような40代以上の保育者は他年代の保育者に比べ、日ごろ集団活動への適応困難な幼児への対応が求められることも多く、園内飼育動物の存在による幼児の気になる行動への効果や心の拠り所としての効果を自らの経験を踏まえより検討可能な年代であったと捉えた。

一方、保育者が園内動物飼育に賛成しつつも、その動物とのかかわりによる幼児へのアレルギーや感染症などのリスクや怪我などの問題、動物種の選択、飼育方法などについて危惧し、そのような問題に対する解決策が無ければ動物飼育を容認出来ないとする自由記述も少なくなかった。さらに、園内飼育動物の生と死

については、ピアジェ（2007）が幼児は生と死を認識出来ず未構築な生命概念を持つと述べているが、本研究の対象となった保育者は日ごろから幼児がふれあう飼育動物の生や死を体験することにより幼児の生命概念は刺激され、生や死を認識し始めると考えていた。幼児への飼育動物を通した生と死の教育については、保育者は園内動物飼育の実践に向けた目的の一つとして捉えていることが示唆された。谷口・木場（2004）の研究結果同様、本研究においても保育者は園内飼育動物とのかかわりを通して幼児が心の安定を保ち、生や死の認識への教育的効果が得られることを期待する反面、園内において動物を飼育することで幼児のアレルギーや感染症、怪我などの問題発生を危惧していることも明らかとなった。

動物介在教育として園内動物飼育を効果的にまた衛生的に実践していく上で、保育者は幼児の発達に見合った適切な動物種の選択、アレルギーや感染症、飼育方法、生態など動物に関する正しい知識の習得が必要とされる。より多くの保育者が、獣医師や動物看護師など動物の専門家と連携し継続的な支援を受けることで動物の特性や扱い方等に関する知識面と技術面を強化し、幼児やその保護者に対しては豊かな教育環境としての園内動物飼育への理解を求めていくことが期待される。

今後の課題としては、本研究の調査対象者数は十分とは言えず性別、園内動物飼育の賛否、園内動物飼育を行う園勤務経験の有無においてサンプル数に偏りがみられたことから、調査地域を広げ対象者数を増やし本研究結果の検証が必要と考える。また、本研究で明らかとなった園内飼育動物に対する保育者の年代によ

る認識の違いについては、その個別性と普遍性を検討するため各年代の保育者にインタビューによる質的調査の実施が求められる。さらに、保育者と動物の専門家が連携したモデル園での縦断調査を通して、園内飼育動物と幼児の発達との関連性や長期的な園内動物飼育実施の利点と問題点について検討することは、保育現場において動物介在教育を展開していく上での実践的な知見となるだろう。

#### 引用文献

- 文部科学省. 2008. 幼稚園教育要領. 法務省法令データ提供システム.  
<http://www.japaneselawtranslation.go.jp/> (2013 年閲覧)
- 濱野佐代子. 2007. コンパニオンアニマルが人に与える影響：愛着と喪失を中心に. 白百合女子大学大学院博士論文 (未公開).
- 井上美智子, 無藤 隆. 2007. 保育者の考える自然とのかかわりのねらい. 教育福祉研究, 33, 1-9.
- 柿沼美紀, 桜井富士朗, 井戸ゆかり, 高橋桃子. 2004. 保育現場における動物飼育: 江戸川区獣医師会「動物飼育実態調査」. 日本保育学会大会論文研究文集, 54, 714-715.
- 野田敦敬, 竹内典子. 2002. 幼稚園における飼育活動と生活料への接続. 自然観察実習報告, 2, 1-8.
- ピアジェ J. 2007. ピアジェに学ぶ認知発達の科学 (中垣 啓, 訳). 北大路書房, 京都.
- 谷田 創, 木場有紀. 2004. 幼稚園における動物飼育の現状と動物介在教育の可能性. 日本獣医師会雑誌, 57 (9), 543-548.

#### 付記

本論文は、平成 25 年度ヤマザキ学園大学に提出した卒業論文の一部を加筆修正したものです。

---

### 保育者の視点から捉える園内飼育動物とのかかわりが幼児の発達に与える教育的効果

栗田薫平・西村信子

(株)ブライトケア・ヤマザキ学園大学動物看護学部動物看護学科

(平成 27 年 2 月 24 日受付 / 平成 27 年 4 月 11 日受理)

**要約**：本研究では、保育者 130 名を対象に、保育者が考える園内飼育動物とのかかわりを通した幼児の心の発達や教育的効果に関する質問紙調査を実施した。その結果、保育者の多くは園内飼育動物が動物アレルギーや感染症、怪我などを引き起こす可能性があることを危惧するものの、動物を思いやる共感性や動物の立場に立って思考する役割取得能力など幼児の心の発達を促進し、心の安定を維持する肯定的な効果を期待していた。また、幼児が飼育動物の生や死を体験することに関して、保育者は幼児の生命概念（ピアジェ 2007）を促進する教育的効果があると考えていることが明らかとなった。

**キーワード**：園内飼育動物、保育者、幼児、教育的効果、心の発達